

障がい者を言い訳にせず 食品事業を成功させ 120人の障がい者を雇用

障がい者就労支援

高知県高知市

どうして福祉の道に進んだのですか？

小さなころから街で見かける障がい者が気になって、いずれこの人たちのお世話ができたらいいなと思っていました。中学生で「愛は地球を救う」という『24時間テレビ』を観て、やはりこの道だなと。大学で福祉を学び、高知市内の病院で医療ソーシャルワーカーになりました。

ところが退院した患者さんが、たびたび再入院するのを見て「問題は病院ではなく地域の福祉だ」と考えるようになり、病院を辞めて社会福祉協議会に転職しました。そこで障がい者にさまざまなサポートをしたんですが、私がかかわる方はあまりよくなりませんでした。むしろ福祉の世話になっていない人たちのほうが元気で、スポーツや芸術を自然に楽しむ姿がか

つよかった。

「お世話をするというスタンスがいけないのだ」と気づきました。私たちがやるべきは「チャリティ」ではなく「チャンス」を提供して自立を促すこと。そう確信してからは、就労支援や自立支援について伝道師のように講演したり、指導するようになりました。

そこからなぜ独立することに？

「障がい者の多くは月収1〜2万円なのに私たちは月収30万円。こんな社会はおかしい。障がい者にも平等にチャンスを与えましょう」と障がい者施設などで演説する自分がたまたま「評論家」にすぎないと気づいたのが40歳のとき。安定していましたが、このままでは自分がダメになると思い、ポーンと支給日に退職。そしてパン屋を始めますが、これが大失敗。障がい者にせめて高知市の最低賃金(当時611円)は払うと宣言し、払い続けたんですが、肝心の商品が売れず私は無給、会社はどん底に。

結局、自分は商売がうまいと錯覚していたのと、障がいを言い訳にした「甘え」があったのでしょ。

どうやって浮上したのですか？

味も、品質も、届ける時間の約束も、すべてにおいて「障がい者がやりますんで、すみません」とは決して口に出さず、歯を食いしばって頑張っていたら、お客さんが認めてくれるようになっていました。

うちは今、カフェや甘味処、パン屋などを経営していますが、福祉色を切なくしているんです。「障がい者がやります」とはどこにも書いていないし、高いお皿も使っています。ふつう障がい者のお店は割れないお皿を使うことが多いんですが、あれはお客さんにとって魅力がない。「障がい者のためのお店」では結局儲からないんです。儲からないから障がい者の給与も低く抑えられてしまふ。

さらにお店には福祉職を配置しないようにしました。障がい者を知るがゆえに可能性の芽を摘むことがあるんです。事情を知らない人が「はい、これお願い」なんて頼むと、意外にできたりすることがある。そういうのが重要なんです。でも本部門などには福祉職の人たちもいます。

今後はどのような展開を考えていますか？

現在、従業員180人中、120人が障がい者です。120人中の40人がトレーニングの人で、うちからホテルやスーパーなどへ毎年一般就労を果たしています。残り80人が継続就労の人。

うちは120人雇っているからすごいなんてまったく思いません。私の目の黒いうちに、地域にまんべんなく障がい者が働いている状態にしたいのです。銀行の受付に車イスの人がいて、ガソリンスタンドでは精神障がい者が給油している。テレビでも車イスのキャスターが天気予報をしている。それが自然だと思っんですが、どうして今そうならないんでしょう？

あらゆる職場に
当たり前障がい者がいる
世の中にしましょう

NPO法人 ワークスみらい高知 代表
竹村利道氏

たけむら・としみち●1964年生まれ。高知・私立高知高校、駒澤大学文学部社会福祉学科卒。病院勤務の後、高知市社会福祉協議会に転職。04年に退職し起業。現在は食品事業のほか美術館なども経営。